研究会記録　1960.10.24　(福本)

Vey　序論について注文ですが、川越田サンどうですか。

Kaw　やろうと思ってやってないんですが。
それをここへ出して頂いてそれを多少議論の都合で箇条書にでもして編集したい。

Kaw　今西サンの序論の schedule はもうできていますか。

Ima　できていません。

Kaw　何よりもこの今西サンの方法論は重要なアレになると思うんですが、そういうことですか。大体。

Vey　ハイ。そうです。川越田サン何か提案はありませんか。方法論について。

Kaw　方法論は今西サンがやるよりもネ。極くかいつまんでもう1回整理してみた方がいいと思うが。

Vey　しかし何というか。これをやるについてこういう点はどうか。というような問題点はありませんか。一番基本的な問題点で…。はじめあれが問題になると思う。地図の構造というかネ。僕らの生活空間のとらえ方というか。まだあの議論が煮えつまってないし。——どういう仕方で全体と関連させるという——。それから少くともどういうトピックを入れて欲しいかということ。

Tan　一番最初の頃に問題のあった事と思うが、culture でなくて society というものを問題にするというような事になっていた訳なんですが、そこの所、最初に云っておかないと…。
系統論のとき等の場合にも culture の発展ということはなかなかはっきり検出できない。society という構造といったところでは発展がとらえられるという。そこのところ、最初にはっきりどういう視角でということを最初に云っておきたい。

Ima　それはね、文化人類学のように culture というものに焦点を合わせたものでない訳です。だから culture の歴史的な時の流れに応じてずっと編集されているのでなく、そういった意味で進化といった場合 culture の進化でなく community の進化だ。併しその場合に、問題はこれはどうせ出る問題だが、community とはじめのつまり environment の関係。これは natural envir. なのだがこれがずっと進んでいくとここの関係が

natural man ⟷ community ⟷ natural environment
↓　　↓　　↓
man made man ⟷ community　　man-made environment

だんだんつまり、man made environment になってくる訳です。この問題をどこまで把握するかという場合、man made envir. というものの中には機械や種々のものを全部が environment としてでてくる訳です。それはそれだけを取り上げるとみな culture と云えるようなものだが、environ としてでてくる。だから culture は知っているといっているが、それは姿をかえてここで envir. として現われてくる訳です。さっき上山サンの云ったように発達の初段階で論じられてもあるところまでくるともうFやDでは論じられない。こういう問題がでてくる訳です。つまりそこのつなぎをどのようにするか、という問題はまだここでは実際は discussi が済んでいない。

Tan　あの second principle の問題にかかってくる。

Vey　それでいま出た問題は本当に論じられてないと思う。今までFとかFOで安心してきたけれども、何というか、あれは結果論ですワ。結果的にオアシス地域が先にきた。それからF地域はあとにきた。そこまでいえるが、実は僕と志邦クンがロシヤとアメリカをに引きずり廻されたですが。これはとんだ災難だけど。何も知らないでやるんですがやってみたら大変困るんです。何故こう困るかと思ったらOとかFに密着していない、19・20世紀というところは。ただねこういうことだけは云える。F地域で生みだされた文化的 pattern なしには発展はなかったということです。それははっきりF地域に固着されている。

Iwa　F地域の何ですか。もう一度。

Vey　F地域に baund されている。アメリカ・ロシアの国家発展のための基本力、殊に生産の条件、機械・鉄道はF地域起源のものなのです。しかもそれはF地域にかなり深くこびりついた何ものかと関係があるらしい、というのはドンドンと機械生産を追っていくと、要するに合名会社とか合資会社とか云う enterpriging が16~17世紀にできてくるのでその形が非常にユニークなものなんです。これはどうも海外発展の船会社あたりとつながっている。日本でも16世紀には出かかっている。あの朱印船の頃の。日本は合名会社といったところで鎖国ですね。あと株式会社まではいかない。日本は自生的には合名会社までいって終である。ところがむこうはずっと株式会社までいってネ。總会ができいろんな機関が有限的になって、その無限責任の personal の責任でなくて、全部が責任をボカしたようなことになる。それで企業が非常に発展する。株を吸収して。無限責任だったら株がドンドン大きくなるとそれを全部個人が背負わなければならない訳でしょう。だから大変なのでみんな逃げる訳です。株を集めないようになる。有限責任だったら自分の一つの部分的な commitment で済むわけです。これでビューとのびる訳です。そういう中で機械がとり入れられていく。巨大資本によってですね。そういうところを見ていくと、斯ういうことが一つ云える。それをこんどソ連なんかは国家でやるわけです。ますます無責任になるわけです。株式会社それなりに個人が破産することがあるんですよ。ところが国家がやったら誰の責任でもなく、みんなの責任の分散ですワ。それでそういうことがロシヤの場合起っているし、アメリカの場合がやはり大変無頼漢的な泡沫会社みたいなものがドンドンできていく。外から入っていく。鉄道なんかはムチャクチャなものです。こういうのがアメリカの企業を大変ふくれあがらせるのだが。僕が云いたいのはアメリカとかソ連みたいなものが出てきたのはFで生み出された一つの culture ですね。そういうものをきっかけにしているということが一つ。但しそれはソ連とかアメリカが必然的にあれがFOだからどうというものではない。ただそのFというところはどうも発生的にはドイツ・イギリス・日本のように狭苦しい所なのです。それで伸びていく所は、これはよそです。海を伝って。日本は台湾とか朝鮮とか、イギリスでも同じ。偶々アメリカ・ロシヤは非常にダダっ広く空間を占有することができた。それからF文化の拠点となるようなF地域を持っているという

Kyoto University

1960・10・24

ことですね。そういう偶然的な combination があるのですから。まあそれ以上の事は自然環境から決定できない。
この方、飯島サンの議論を中心にして環境決定論に対してかなりここでは議論が湧いたが、やはり僕はロシヤとか
アメリカにくるとますます環境決定論ぐあい悪い。遠隔的な関係、非常に遠い関係です。

Nak あの vegetation と土壌の間に action の co-action がたくさんあってね。森林型土壌でできている。森林
ができると森林型土壌ができている。それが又、森林を繁茂させる。無理にはぎ取ってアラと急激に流亡
がおきたりする。丁度 man made envir. が森林型土壌に似てそれに当るようなぐあいになって、man made envir.
というものが対応すると思う。併し人間の場合はそっちの力が vegetation の場合よりずっと最后に大きくなる。種々のもの
気候との関係なしに。数学の発達みたいなものだ。

Yon その上に成立した F 文化、O 文化というものは、O の場合は F の影響なしに成立しないし、F の場合 O の影響なしに
成立しない。何かそのような要素があるのでないか。

Uey 一寸待って下さい。O の場合は F の……。

Yon 相互の示――だから O の場合は F というものが示――その外側にあるということなしに存立しない。逆に F の方は O と
いうものがない限り成立しない。というような両方とも必ず必要だという要素があるんではないか。F, O という
ものは事実ヨーロッパなどが考えられると思うが。併しそこにでき上ったものが O と F という風なもの両方を必要と
しているという面があるのではないか。というのは OF とか FO とかいう考え方がありますネ。これをそのまま使うかど
うかは別として例えばアメリカやソ連の場合は FO 型の国だとか F のまあ一種の Variant で F から O へのび
ていったものだという風な面がある。それから逆に F の国家が出来ている時には逆に OF の影響が非常にある。OF
という云葉を使うとすれば、例えば南の方からサラセンなんかの影響が西ヨーロッパに拡まっている。日本に対
して中国の影響が少くとも 5c 以来あるわけでしょう。そうするとあの F 地域における F 文化というものは O の要素なし
には育ち得なかったという要素があるのではないか。という気がする。だから Natural environment と
いう云葉を使うとすれば Natural envir. では O, F がはっきり別れている。それから intermediate のところを
考えることもできるしそれを細分していくこともできる。これは一つ、natural environment というもの人名をはず
してしまった上でできる。それと man made envelopment というか cultural envelopment と
いうか、そういうもので出てくる F. culture を O. culture という一つ違ったレヴェルのものがある。
我々の問題にしているのはむしろ community の進化というものはあの Natural env. としての O 地域、F
地域というものから既に離れてしまった、O なしには存立し得ない F 地域の発展、それから逆に F なしにはあり得
ないような O のあり方という風なものが問題になる。それからこの場合……。

Uey その点に疑問があるのですが、あの文化の場合、そのように reversible に考えるより一応僕等の今迄やってきた
ところから irreversible な、例えば中尾サンのやった abro-india、とかいうものこれと農耕との関係
あったかどうかわからないけど栽培植物に関しているとそういう風な関係がおそらく成りたつであろうし――
O がなければ F がないという風な型、F がなければ今のソ連とかアメリカがない。一応大きく見れば irreversible
な矢印を考えていけるのではないか。と僕は考えたのだが、その点だけ疑問。

Yon その点だけ僕も認めます。併し僕が今そんなことを何故持ち出したかと云うと、谷サンと分担で F の方を一応僕が
系統分類するというつもりでやってみているのですけれどやはり enrelopment というものを考えるとしたら例えば封
建社会というものが成立する理由と成立した歴史的プロセスを辿っていったら O 地域というものを抜きにして考えられ
ないようなものがでてくる。それで実際にでき上ったのは F 地域であっても O からの action がない限りでてこない。
そんな風なものを考えてみる。

Ima それはそれでいいです。併しはじめの方で、最初の O の civilization が発達したときに F がなかったらということはない。

Yon その時に F が要らないではないか。というんですね。

Ima えゝ、そうです。

Yon それもわかります。併しその時にも既にあれは存在していたんです。地球上にそういう given env. としては
F 地域、O 地域もあった。たまたま O 地域の方で或いは O と F のボーダーなりをうけるところで civilization ができ
上っていくということがある。

Uey そうだけれど問題は cultural env. という level をとった時、そういうものが必要であったかということですね。

Yon O 地域の場合は僕は知りません。云えません。

Uey だから、irreversible に考えたらいいのではないか。大きく見たら。

Ima ずっとそれはひとつづきだけれど。要するにいつでも何か関係がありますけどね。
上山さんの場の理論から云ったらね。まづ O に中心があってそれから F の方に働いている力がある。F が成長している
と逆に F から O の方に働きかけている。それは何時でも action, re-action はあるけれど。どちらが能動
的に働いているか。高い方から低い方に culture が余計流れる、そういった例えば両方加味すればいつもそう
いう関係、どちらに weight をかけるか、ということが云える。

Iin O ばかりに接していると、やはり米山サンの云うように土地がないとなかなか F を切り開くということは体力が要る。
やはり淮漑文明では何と云っても楽でしょう。そういう点、irreversible。

Yon 僕が最初にいったのは、両方とも併立しましたけれどね。

Uey よくわかりました。意図はわかりました。

Yon 僕が云ったのは相互交渉を強えず持っているという訳ではない。そういう状態があったという事なのです。
それからもう一つ、afro-india origin もよくわかるんです。理解できる。それは或る意味で文化の
見方として二手あって、一つは純粋系統論を追いかけていくという行き方、それでいくと、例えば一つの鉛筆
を、というと鉛筆ばかり追いかけていくという行き方で、タロイモの現在の分布地域から逆に、そういうところに
戻っていくという行き方、或いは逆発生点をどこかへ見つけて、そこから線を引いていくといういき方がある。それは
diffusionism でね それだけで進化ということは云えない。だからその立場だけでいくとエジプトがすべてのものの
中心だというようなところへいってしまうような危険性がある。と云うのは O 型で発生したものが、O 型でいちど花咲いて
それから F 型へいって、今度は F 型で花咲いてそれから逆に O 型にくる。そういう時何がきたかということを考えると

Kyoto University

1960.10.24

diffusionism の立場でいけば解けなくなる気がする。

Kaw culture traits の伝播かきたのか、体制の伝播かきたのか。

Yon 体制というと一本一本かもっているものだか ——

Ima 0型かかすんでいるとしても0型は0型なりの最初からしまいまでの One series があり dark age があったので。そして又、影響を受けてそれはそれで一本の線がひける。だからこういう風な線でなしに全部の線がひけてその中で重要なものがここにあって云々というようなことが云える。

Vey でもちょっとここでは diffusionism はとっていないと思うのですが —。diffusionism はひとつの index に。たしかに中尾サンの話などはなるのだが、併しそれはもう少し大きな、例えば afro india といった一つのずっと大きな流れで、どう展開していくかというようなことが云われているように思う。ボクの聞いた範囲では。だからかなり面的なものも皆に押え乍らやっているのであって一つの線を追っているという議論ではないのでないか。

Yon そう、一つの線を追っているのではないけれど一つの線を追うようにならざるを得ないような面があるでしょう。irreversible ということにひっかかったのだけれど irreversible ということを考えたらそれは一つの線を追っているということになりかねない、ということがあるのではないか。

Ima それは進化というものを irreversible なものという立場をとるかどうかということだ。だから部分的に消長があっても人類全体として一つの方向、別にこれを進歩と云わなくとも irreversible に進んでいるという —— 僕等はそういう考えだ。だから本当の部分的に見たらね、degenerate するところがある。

Kaw 0Fの問題でネ、私はこういうふうに考えてきたのですが、O.F.というのは人類の歴史のかなり発達した後の時代になって意味をもってくる。そういう natural environ. そのためにはもっとその0Fを問題にしている0Fよりもっと小さい環境、例えば川べり、一つの大きい川べりに集とりしているとかいろんなもっと0Fよりも小さい規模の環境が意味をもった時代があったと思う。それからだんだん発達して、我々の問題にしているような O.F.というものが問題になる時期がやってくる。それがまた、うんと発達してアメリカとかソ連がでてくるとO.F.的な問題をはみ出したふうになってくると僕は一応考えてみた。だから0とか Fとかを問題にするのはそれに対応した man made envir. を人間が確立することによってそういう環境に意味づけを結果的に与えた。そういうことになっているんぢゃないか。ですから例えばお米というものを、水稲作というものを稲の栽培化によって発見するでしょう。そうするとそれに水田のできるような土地があるという空間に対して意味を与えていく。そこでいわば一つの環境ができ上ると思うんですよ。新しい意味を与えられてそういう形で O.F.というものはできたのだと思う。やはり全体として問題にしなければならないと思うのは man made envir. というものは人間が何かその技術を作り出して生産の技術とかを作りだすことによって自らをある環境のワク内にはめ込んでいく。新しい環境のワクを設定した結果になっていくという風な気がする。

Ima 聞きたいことがある、一つは単層同質の全部がまだ単層同質であった時代があったでしょう、その時の population の想定図を作ろうと思えば作れるのか。大体、現在アマゾンあたりの密度があるかということから正確にはできないけれど、その頃には地球上の人類の人口がいくらであったということまでだせる。所がその次のある重層社会のでてくる重層異質の頃となると結局人口の分布図を画いたら0地域のしかもある部分に非常に集中している時代がくる。Fの方はまだスカスカや。そういう時代がある訳です。それからもう一つFができてくる時代。ここで一つ云いたいのは man made envir. ということを云いだせば agriculture がはじまったら自然をかえていると云えるけれども、もっとつまりそれの極端になってきた機械時代に近づけて考えるとこの時には F地域に人口が集中してそれと対比した0地域はまことに ——、昔はいちどそこが人口の集中を現わしていたのだが、今日はまたFの集中から見るとスカスカだという三つの図をいちど作ってみてもよいと思う。

Vey それは面白いナー。

Ima それは地理学の助けを借りたらすぐにできることだ。ハハハ……

Kaw 併しそれだけの資料が得られるだろうか。ヨーロッパなら可成り何世紀までではフランスに人口が多くてフランス人口3000万～4000万おって、ドイツはまだスカスカや、ところがしばらくのうちに変ってくるということは探せば近世のヨーロッパならできるかもわからないけれども他の場合はなかなか……。

Iwa 0地域などというものはどこまで population が増大したか、0地域全体として。

Ima それはわかるでしょう、そういう数字はネ。正確に数字をあげていると人が納得するからね。ハハハ……

Vey 中国については森鹿三サンがやりかけていますね。

Iwa つまり文化の高さではいま云われたように0からFにということがあるけど、文化の高さと population とが応じていたかどうかということが問題ではないだろうか。

Ima 併し、例えば population がそれだけ集っているという為には、それだけの食料が必要でしょう。或る程度、例えばエジプトとメソポタミアのあたりの発掘でどの程度の都市があったかということがわかれば、その者を支えているのにどれだけの食料が必要であったか、現在それから出せる訳だ。昔の人口は3倍も余計にメシを食ったということがないとすればある程度スミズミまで正確にいかなくても多少、なるほどと思うようなものが出来ないか。

Kaw 全部、地図のスミまで埋めようという欲の深いことを考えるよりももっと simplify して今西サンがいまいわれたようにそういう情勢は変りませんという、これをスキームで表現しておいて、あとはいい例を拾って例えばということにしたら。

Ima Steward がスペインの conquest のとき南アメリカにおける population をだしている。それは何もその時全部資料があった訳でないけれど、今でも使えるものは使って推計している訳です、その程度のものはできると思う。

Vey せめて比率がわかるのでいいわけでしょう、同時代的などっちが多かったかという大体の推定ですね。それともう一つは時代間の変化ですネ、例えばインドではカーブがまれくらいだったのにイギリスや日本ではこういうすごい対数曲線を画いて発展した。

Ima それが必要だというのだ、だから世界の人口は発明よりおくれますわな。結果として人口が増えるのは、しかしそれでも人口の普通のスー—とした滑らかな線と違うと思う、ある農業革命のあとにギュッと人口が上り、又産業革命の後に人口があがっているという。すると世界人口というものは一つの線に画いたとき、そのカーブの変り目に非常に意義があるということ、demography の上からでも云えるワネ。

Kyoto University

1960. 10. 24

Kaw　それがかえってまずいのです。

Ima　ナンデヤ。

Kaw　それわね、実際にはそういう段階的な発展とか生産技術の発達で飛躍の時期があるわけだが、例えばどこかで農業の発明 cultivation がはじまる。すると人口でいくとその様式が diffusion していくる。カーブが俄かにふえる訳でない。

Ima　ボクはそういうことはないと思う。それは年代の切り方や何やらでカーブがきづいように見せようというのはネ——(ハハハ…)

Kaw　いやそれは factic の問題で。

Vey　産業革命前後からこうなるでしょう。なりませんか。

Kaw　世界中でやるとなめらかになって了いますよ。

Vey　いや、世界中でなくて国別に。

Ima　それね、君やらはらへんやろと思うけど、結局世界中の人口が増えるのではなくて、ある部分がギューッと、ふえる、すると世界の人口はとっていてもそれはでてきます。
その本当の単層同質からギューッと何億というものと違う最初の agricul revol. devalution の結果は。
他はみな単層同質でいよるのやさかい、その時の差はたいしてあがらんかもしらないけれど、それが O地域の開発するときの一つの表現になる訳だな。

Iwa　ヨーロッパという様な範囲でやると、O地域、つまり地球海岸の地域の人口増加は非常にはっきりでてくるが、それを中央アジアとか蒙古を含めて、バラして了った場合ネ、どれくらいでてくるか。

Nak　最初の3つのあれを thema で出して、あとは具体的 Sample 出す方がよい。

Ima　単層同質とか、今でも人口の非常に密度の少い所ヤネ。比較にならん程少いということを頭に置かねばならない。すると結局集中地域だけで人類の人口といっても表現されているみたいな所があると思うのだが。

Iwa　O.F といっても O のあたりは大体中央アジアがつらなってをりますけれど、その周辺の F と更にまたその周辺が種々新大陸に入れた場合それをどんなふうに処置するかが問題になると思う。O の中にもオーストラリヤの方も入れるかどうか、カラハリ砂漠ナド。

Vey　それでいま、中尾サンの云われたような原理が一番いゝんではないですか。schema 的に出しておいてね、この時期の O はこれくらいだけれども恐らく F はこれくらいだと。

Iwa　いや、だからね、この時期の O と云っても中央アジア辺りのところと他とで違うし。

Nak　年代毎にやっていったら、アジアで殆んど人口が占めてしまうから。シナとインドで。だからなかなか難儀なシロモノになる。

Iiz　やはりその場合、ユーラシヤ大陸に限っておいた方がいゝのでないか。

Vey　谷クン、あれはいま、ヨーロッパでは経済史家がかなり人口のことやっていますね、あのペストの時だとか何だとか、その労働の賃金、労賃なんかこの関係をみている。

Nak　アメリカはやはり応用問題としてチェックする意味でやるのは非常によいと思う。

Ima　それは、これも今日云いたいと思っていたんだが、ここで一通りユーラシヤを中心にして種々な theory が成立ったけれどそれはやはりアフリカなりアメリカにあてはめてみて、そこで通らなかったら何故通らないかを答えておかないと一人よがりになって了う。それで多から問題になっているのは新大陸で O と F と同時に背伸びしてきよるやろ?

Kaw　どういう意味です。

Ima　マヤとか中央アメリカの森林帯の中に文明が発達する訳でそれがこちらの schema のようにインカが先にできて、それが流れてりって O を開発したというので説明できるかどうかだ。それから今度何故つづきのアマゾンの方へそれが影響していないのかと。そしたらアジアの例で云ったら今度はアマゾンの方へデーッと O を抜くのができてこないとダメな訳やネ。

Nak　schema では農耕文化だったらアジアで云えるのがアメリカでピシャッと合うんではないか。

Tan　併し、あてはまってもものすごく劣等性でしょ。

Nak　層がうすい。

Tan　それで僕が問題に思うのは結局 community の規模です。つまりいくらオアシス地域でも面積が小さかったらやはり climax に達しない。技術的にも発達はおそい、つまり F を開墾するだけの技術は発達しない。何かそういう scale が問題になってくると思うが。これまで community の形態論だけをやってきた訳なんです。

Iiz　Wittfogel のようにいゝかげんな density ということですませている。いわんとするところはわかるけれども——。確かに trend としてはそういうもの大きくあると思うが。

Kaw　まあ、ボクは、湿潤熱帯の扱い方、ユーラシヤの場合には南のヘリの方にしかでてこないんでね、あまり大きい問題になるんでね。
(拡げる時の難物は) marginal とか何とかで片づけておけば済むけれど、外に拡げた場合、世界三熱帯の問題だ。
湿潤熱帯、非常に厄介な。
湿潤熱帯の場合、ボクはうまくいくように思わないけれど。

Ima　それから湿潤熱帯、つまり tropical rainforest の他にアメリカにも南米にもものすごい拡がりを持った中間地域がある。あれが何故開発されないのか。

Vey　中尾サンの今の……

Ima　それはブラジル辺りでもみんなあとから入ってきたものでそういう所をどんどん利用している訳だ。それを原住民は利用していない。

Nak　それについて、大分沢山そこまで話さないと。

Vey　と云うのはね、終止一貫川表田サンからあそこは困るということがでている。湿潤地帯が栽培植物の見地からいくとうまくいくのだったら相当参考になる。

Nak　とにかく東南アジアの農耕文化も一番古い形で置いておいて、その環境のあれで O とか F とか云う議論が盛んだけれど、そこのところみていると tropical の性格というものがバカに強くでてくる。バナナダシロイモはひどく tropical。

Iwa　O に高い文明が先づできて、それによって開墾されたということをあまりアクセントおかれるより O の力によって開墾される前の F 固有の社会というものをもうかし考えてみる必要があるのではないか。

Vey　それはそうですネ。その点はさっき川表田サンの提案が非常に適切な提案だと思う。と云うのは O とか F とかが人類発展史のどの段階で問題になってくるかということを云ったでしょう。やはりそれを一本入れておく必要があると思う。無條件に O.F ぢゃあないのです。O とか F とかを持ってくるのは僕らの議論では重層段階、だから重層ができる前と重層が解体していこうというところでは意味を失ってくる。だからそういうところが人類の資料の一番たくさん

Kyoto University

1960・10・24

残っているところでネ。僕らにとっては興味が非常に深いところなんです。それで関心の上ではここが山になっているが併し、もっと人類史の長い歴史から見たら中尾サンの云われた部分とか岩田サンの云われた部分の方がprehistoryとしては重要なんですよ。でおそらくabroindiaなんていうのは單層社会が問題になってきていると思うんです。むしろ重層の前提條件として。そこでいま云った湿潤熱帯といった辺りが非常に問題をはらんだ地域になっているという風に人類史全体の流れの中で位置づけて、そこではもうO.F.ということは殆んどnegligible、場合によってはまだOなんかでことを分ネ。沖積平野でことを分るというようなことはできないというかな。そういう段階でnegligibleといったらいかもしれない。丁度そのO文化が展開しているときにまだ湿帯のforestがまだ十分展開できないと云うのと似たようなものと思う。

Iiz それた関係してだけれどO型の発展はどう考えても大河は利用できたか、あの時代の技術水準でね。

それにしても果して、wittfogelのimagerに近くような意味でそういうことはない例えば佐藤長サンのそうシナの社会などの場合はむしろ通商でorganizationを作っていた……そこまで云ってよいとまずい、ecologyが問題としてまずいのですか。

その問題がOの最初の重層に移る前後から重層の初期にかけて問題になる大きな川が利用できたか。

Tan それはcommunityを作る時の要因としてirrigationを持ち出せるかということになる訳ですか。

Iiz いま、一応それを決めてにしている訳ですか。

Uey しかし、それは北支の場合とメソポタミヤとでは条件が非常に違うと思う。と云うのは北支というのは典型的なオアシス地域ではない。砂漠と対照されるような地地でないし。と云うのは、あれはケッペンは余りここでつかわないことになっているがケッペンでいうと違うんですね。むしろ地中海辺りに似ている訳です。北支の方は。それでこちらは典型的な砂漠的な処ですからね。それから灌漑用水の方も典型的に発達している訳です。メソポタミアでは。

Iiz 支流の利用ぢゃあないんですか。僕は知らないんですけれど。大河の利用なんですか。

O 大河の利用でね、下流地域に入ってからはもう典型的に大河の利用でネ。それは大変な労力がないと全部砂漠になって了うんです。もういま殆んど砂漠になっているんです。それでいつも維持しなければならない。すぐ消えてなくなる。シナはそんなことはない。

Nak シナは灌漑など要い。ボクに云わせればnegligibleです。

O そうだと思うナー。

Nak 北支を歩いてみると灌漑水路に対する農業などは汽車の窓から見えない。

Iiz Fになる。

Uey メソポタミアは今でも飛行機で飛ぶと遺跡が歴然と残っている。下流地域に灌漑の遺跡がずーと。その辺ずーと廃墟のテル一杯あるそうです。その灌漑水路に近く。完璧に人工で維持した感じがする。

Nak 西アジアの灌漑というのは恐らくカリフォルニア程なの。純野生植物に灌漑を施している。あそこまで造った方が確かかもしれない。

Uey カリフォルニアね。あーそうか。そうかもしれない。

Nak メソポタミア。殊に西アジアの。

Uey カリフォルニアはどういう理由でやっているんですか。水は？水源は井戸ですか。

Nak 水路を作ってね、引いていって流すんです。

Uey やはり山から引いてくるんですか。

Nak エエ、山から引いて。

Tan それはコレクティングしている処に水を流してそしてcollectするものがうまく育つようにするんですか。

Nak アー そういうやり方。

Uey それでwittfogelはシナを中心にしたところに興味があるんぢゃあないか。そしてそれを何とはなしにanalogyをやった処にネ。だからやっぱり……。

Nak F型とO型をはっきり分けなければいけないんではないか。

Uey それはオアシス型というよりか、もっと丹念な。――この前から今西サンがOというのは余りstepとか何かに分けない方がよいと云われたように――もう少し具体的に北支の条件と西アジアの条件との違い、殊にメソポタミアの違いを具体的にもう一すやったらという……その上で考えたら同じりでも。寒い北寄りのOとこっちとの違いですね。それからこの前問題になった雨の問題もありますし。そういうことを全部考慮に入れた上で構造の違いをやった方がいいと思うし、それからボクはエジプトが凄く違うと思う。エジプトとあそこでは全然違う。

Ima 灌漑というと日本人は水がいつもずーと流れているように思うけれども、本当は一週目に一度くらい水をシューッとたたえるくらいの程度のものだ。

Iiz それならなおさら大河の利用なんて、いらないわけでむしろ支流でもかまわない。

Ima それはかまわんです。

Iiz bureaucracyに直接なお結びつかなくなる。

Nak bureaucracyにその場合ますます結びつかなくなる。川添田君の云ったところは小麦作は4回……。その統制問題というのは非常にある訳なんです。

Iiz いや、それはlocal levelではボクはあり得ると思うんです。それかやはり国家権力と結びつく為には大灌漑というのが全体的お膳立になっている訳なんです。

Nak 大灌漑というのはネ――

Iiz 水がバルキイであるから、そしてモービルであるから

Nak 大灌漑というのは、今の西アジアの場合を除いてどこにありますか。

Ima それをwittfogelに聞きたい。ハハハ…

Iiz Wittfogelは大灌漑の多量の水を処理する為に高いビュオクラシイが必要だという事が前提になっている、それで私はそうではなくて、local levelでできることをいきなりそれに結びつけるという点に疑問を感じている訳です。メソポタミアは谷が浅いんですか、あの大河の谷は深いんですか、畑の面積と比べて。

Uey 非常に沖積平野にきてから距離は長いでしょう。

Kyoto University

Ima　沖積平野というものは自然のままであれば アッチ流れ、コッチ流れして乱流するところだから土手ができているというのは人間が作ったのだ。だから灌漑という問題もあるけれど、むしろ治水という問題があったのではないかと思う。シナの……。

Tan　イヤ、それこの冒石という人が云っていた。あの安陽の所は結局部落ごと移り住んできた。インキヨのある所は丁度洪水がここから起る。その手前の高い所に部落がある。つまり洪水を避けるという事が一番考慮されている。

Kaw　僕はシナのことはよくわからないけれど irrig. している所でパッと頭に浮かぶのは結局支那の周辺に近い所、熱河とかゴゲンとか。それからもっと popular にはそこから西へのオアシス。それからずっと南の径水、渭水、黄河、great Bend、あの辺にあったのではないか。

Nak　最后の所は、南西側のところを僕は半年兵隊で歩いていたところだ。灌漑なんていうものはヤサイ以外絶対ありません。

Iiz　それで私はどうも大型の irrigation 問題 治水の問題、たしかに今西先生の云われたように大いに考慮を残しておきたいと思うが irrigation の場合、やはり北インドの場合、パンジャブなどを見ていてもみんな池で天水です。チョロチョロ川を堰きとめてやる位いでなかなかジャムメ河、ガンゲス河を直接ひいてくるなどというのは遂に見た事がない。恐らくインド共和国になってからの問題、どうもその点――。

Ima　だからビオロクラスィという以上は state というものを考える訳でしょう。Bureaucracy の起源というものを考える、state の起源を irrig. にもっていこうとする考えになるか。我々の今迄の研究会の結果では恐らくそんな state の起源というものは取りあげていない訳です。それは何か無理があるのでないか。

Nak　しかし、ボクは灌漑について一つ考慮しておく必要があると思うのは irrig. barming で麦を作ると、たいへん増産になってくること。それはその辺の国連の統計みたいなものではないが粗放農業としての irrigation 農業というのはみんな出来がよい。大体、いま日本の麦作よりカラコラムの山の中の方が反当収量が多そうダネ。麦が。

Iiz　その点、確かに。

Nak　ひどく intensive なものなのでしてね。それでその生産力たるや古代的の時代においてはおそらく驚異的生産や。

Ima　日光の十分ある地帯だと、灌漑をやって麦を作る。

Iiz　そういう面からとらえれば確かに local なものであっても irrig. で他の生物が割合維持されたっていうことは考えられる。

Nak　だから西アジアの irrig. 農業が人口の集中や何やらを非常にきたし易い。

Ima　ボクは治水ということを何故云うかというと、これは家からの持説だが假りに最初は斜面とは云わないでもわりあい山手のところに人間が集落を作って毎年ものすごい濫乱が繰り返されるような所は進出しなかっただろうと思う。ところが治水によって、そこが利用できるとなると、非常に大面積が利用できることになる訳デス、沖積原が。するとそれだけの生産に対して、そこえは人間が余計住める訳で文明ができる為にはそういう沖積原の征服ということがどうしても何かの技術によって成りたつということか、それからまたどこの国でもそういう一時期があってそれよりも家にさかのぼったら沖積原は捨てたんではないかという気がする。それからもうひとつ、そこで問題になってくるのはその沖積原の征服した結果、そこへザーと例えば麦と兵隊みたいに北支のところを汽車に乗っていてもズーと麦ばっかりです。そういう食糧を大量に生産するという、その段階にくるのでそれが元の熱帯的な、園芸的な家の囲りに色々のものをチョロチョロ植えてた。変って企業とは云わないでも、非常な生産の型の変化がここで起ってくるんでないかと思う。そうだからそうなってくるともう一つ飛躍するかもしれないが麦とか米というものを持っていたヤツはダーッと沖積原において伸びられた訳だ。そういう適当な作物というものが結びつきということは、作物というものは natural environment と man made の間をつなぐものとして大変重要だ。丁度家畜で云ったら、羊・馬・牛というようなよいものが居たからいいが象やキリンばっかりだったら始末に負えないという。何かそこのところ、やはり旧大陸と新大陸の違い、或いはサハラ以南のアフリカのホークレーというものと結びつきがありはしないかということを考えたいと思う。

Kaw　いい家畜がいたといういい踏み台を使わなかったら伸びられなかったということはあるだろう。

Ima　このような場合は必ずしも家畜が初めから結びついていなくてもよかった訳だ。米はある意味からいえば西洋人が見たらこれは園芸の本に入れている。米を作っていたときも元は園芸的な栽培であったのが沖積原にでてきてはじめて広々とした水田になってその生産によって今度は人口が支えられて社会が発展していったというふうに見たらどうか。だから東亜というものは少くとも米によって非常に促進されているんではないかと思う。

Nak　しかし、ボクは米を文明発達史から見ると割に今まで役割がなかったと思う。インドを米と思うのは或いは東半分だけで、古代の何とか王朝というようなものは大麦・小麦地帯でできている。シナでもシンレイ、ワイ河以南ではじめの展開はみんな小麦でない、雑穀と大麦でできていた。

Iiz　それはそのままいいことでして、やはり0から下への方向……ハハハー　やはり明らかにモヘンジョダローの辺りの小麦地帯はだんだん文明が移るに従って東の方へ――

Nak　米地帯というものは、インドで米地帯が重要性をもってきたのは恐らく英国が入って来る頃からでないか。

Iwa　タイでバンコック周辺が開拓されたのは 18c, 19c。

Ima　そんなに新しいんですか。

Kaw　インドでも、インドの東側は古くから東インド会社がやっていたんだろうけれど、商売始めた初期などあちこちスカスカにあいてた。それから草原ネ、そういうものが大分多かったようだ。

Iiz　モンクメールの文明の系統というものはどういう……。あれは独立してあれしたんですか、それが又――。

Nak　あれはインドから紀元2c くらいですね。歴史にでてくるのは。

Iiz　どちらが factor が indigenous なのか predominant でインドのあれが加った、支配者として乗っかった丈ですね。それで上山サン問題は人間がそういうふうにいろんなものを生活の――→技術を発明して man made environment を新しく意味を与えるでしょう。与えることによってそいつが、やはりハネッ返って、regional な文明の pattern というものを作っていったんだと思う。その文明の pattern についての研究会で主に問題にするのは society とか community というものの pattern でしょう。そういう pattern をゆっくりおさえないと0とか下というものをもう一つ……。

あと つづく

Kyoto University